

入場・参加無料

令和5年度文化財巡回企画展

期 間 令和5年10月14日(土)～令和6年2月14日(水)

時 間 9:00～16:30

休催日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は翌日)、祝日の翌日
(土曜日及び日曜日を除く)、12月29日～1月3日

会場1 小田城跡歴史ひろば案内所

令和5年10月14日(土)～令和5年12月13日(水)

会場2 谷田部郷土資料館(谷田部交流センター3階)

令和5年12月21日(木)～令和6年2月14日(水)

体験講座

土器にさわろう!埋蔵文化財整理体験

日時 令和5年11月18日(土) 10:00～12:00

会場 出土文化財管理センター

内容 土器の洗浄・拓本・接合

定員 市内在住・在勤・在学者(小学校4年生以上)
24名程度(応募者多数の場合は抽選)

応募 10月20日(金)までに、いばらき電子申請による申し込み、又は往復はがきに、住所・氏名・年齢・電話番号・「体験希望」と記入し、つくば市文化財課宛てに郵送(当日消印有効)

講演会 茨城県における古墳時代の「豪族居館」

日時 令和5年12月23日(土)
14:00～16:00 (13:30開場)

会場 つくば市役所会議室201

講師 谷仲俊雄氏(石岡市教育委員会)

定員 約120名 当日受付(事前申込不要)

発掘!! 圏央道

—つくば市内
遺跡出土品展—

つくば市文化財課
梶内山遺跡居館跡全景

写真提供:公益財団法人茨城県教育財団

問合せ つくば市教育局文化財課

〒305-8555 つくば市研究学園一丁目1番地1

☎029-883-1111(代表)

<http://www.city.tsukuba.lg.jp>

歴史・文化財



はじめに

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道(以下圏央道と略す)は、平成15年(2003年)3月29日に、つくば市内で初めて、つくばJCT-つくば牛久IC間で開通しました。市内の圏央道建設に際して、平成11年(1999年)から23年(2011年)に多くの発掘調査が行われました。圏央道の市内での開通から20年、その貴重な発掘調査成果を見つめなおし、それぞれの時代毎にテーマを設定して、特徴的な遺構や出土品が語つくば市の歴史を紹介いたします。

1 旧石器～縄文

氷期が終わる頃の人々の痕跡

旧石器時代の終わり(1.8～1.6万年前)から縄文時代の初め(草創期・1.6～1.2万年前)は、氷期の終わる頃で、寒冷的な気候から急激な温暖化、そして再びの寒冷化といった気候の変動期に当たります。日本列島で土器が作られるようになったのも、この時期です。その頃つくばにやって来た人々の痕跡が、圏央道の遺跡から見つかっていますので紹介します。

◆手代木田向西遺跡の細石刃

手代木田向西遺跡(①)では、他時代の遺構覆土から、細石刃2点、細石刃核6点が出土しています。細石刃は、カミソリの刃のような小型の石器で、木や骨などでできた軸にはめ込み、槍や鎌などの刃として使われたとされます。細石刃核は、細石刃を剥がした残り部分です。細石刃には、より大型の道具を作れるとともに、刃を交換することで補修ができ、さらに必要とする石材も少なく済むという利点があります。関東地方では、旧石器時代の終わりから縄文時代の初めに使われました。

◆手代木田向西遺跡を遺した人々

手代木田向西遺跡の細石刃・細石刃核には、岩手県産の黒曜石、奥久慈男体山周辺で採れるデイサイト(トロトロ石)、久慈川産と思われる珪質頁岩が使われています。当時の人々は、広い地域を移動しながら生活していたと考えられているため、手代木田向西遺跡を遺した人々は、岩手県から福島県、茨城県北部を通してやって来た可能性があります。

- 例言 1. このパンフレットは、令和5年度文化財巡回企画展「発掘!! 圏央道-つくば市内遺跡出土品展-」の展示内容を解説するものです。
2. 所蔵者や提供者を表記しており、表記のないものは、つくば市教育委員会の所蔵です。
3. 御指導・御協力をいただいた方々: 茨城県埋蔵文化財センターいせきぴあ茨城、公益財団法人茨城県教育財団、土浦市立博物館、東京国立博物館、谷仲俊雄氏。



圏央道建設に伴い発掘された主な遺跡

- | | |
|------------|------------|
| ① 手代木田向西遺跡 | ⑥ 高須賀中台東遺跡 |
| ② 梶内山遺跡 | ⑦ 平北田遺跡 |
| ③ 中内西ノ妻遺跡 | ⑧ 島名ツバタ遺跡 |
| ④ 高須賀堂ノ前遺跡 | ⑨ 下大井遺跡 |
| ⑤ 高須賀道城入遺跡 | ⑩ 樋ノ沢久保遺跡 |

※国土地理院「標準地図」をQGISとAdobe Illustratorにて編集。



手代木田向西遺跡 細石刃と細石刃核



想定される移動ルート

◆ 梶内山遺跡と中内西ノ妻遺跡の尖頭器

梶内山遺跡(②)からは、柳の葉のような細長い尖頭器がまともに出土しています。本ノ木型と呼ばれるこれらの尖頭器の石材には、ガラス質黒色安山岩、黒色頁岩、珪質頁岩が使われており、新潟県や群馬県などでまとめて作られたものが遺跡周辺まで運ばれて使われ、補修や作り直しがなされた後、捨てられたものと考えられます。また、中内西ノ妻遺跡(③)からは、大型の尖頭器1点が出土しています。石材は白色の珪質頁岩で、新潟県産のものと似ているため、同地からはるばる運ばれたものかもしれません。



左: 梶内山遺跡 尖頭器 右: 中内西ノ妻遺跡 尖頭器

2 縄文 縄文海進の頃のムラ

1.1万年前頃に氷期が終わって温暖な気候になると、海面が上昇していきました。これを縄文海進と呼び、今から7千年前頃にピークを迎え、海が現在よりも内陸に入り込んでいました。その頃のムラの跡が高須賀堂ノ前遺跡(④)と高須賀道城入遺跡(⑤)で見つかっています。両遺跡は、小貝川へ続く谷津に面した台地平坦部から斜面にかけて広がっています。

◆ 高須賀堂ノ前遺跡のムラ

縄文時代の竪穴建物跡5棟、炉穴7基、土坑101基が見つかりました。出土した土器から、竪穴建物跡1棟と土坑2基が早期前葉、土坑1基が早期中葉、竪穴建物跡4棟と炉穴7基、土坑14基が早期後葉のものと考えられています。炉穴は、穴と火を焚いた跡しか残っていませんでしたが、当時は図のようなかたちをしていて、屋外で煮炊きをしたものと考えられています。市内では、根崎遺跡などでも早期のムラの跡が見つっていますが、数はとても少ないです。当時の人々は、地域内のいくつかの場所を移動しながら暮らしていたと考えられています。

高須賀堂ノ前遺跡全体図

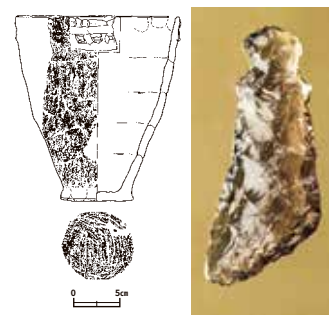
※『高須賀堂ノ前遺跡』に一部加筆



炉穴想像図

◆ 高須賀道城入遺跡のムラと墓

縄文時代の竪穴建物跡5棟、炉穴2基、土坑307基が見つかりました。出土した土器から、土坑1基が早期前葉、炉穴2基と土坑4基が早期後葉、竪穴建物跡1棟と土坑10基が前期中葉、竪穴建物跡4棟と土坑11基が前期後葉のものと考えられています。前期の土坑には、人が埋め戻したような痕が見られ、副葬品と考えられる石器や土器、頭に被せていたのではないかと考えられる逆さで出土した土器などがあることから、墓穴である可能性が考えられています。前期中葉以降になると、竪穴建物が環状に分布し、中央などに墓域が配置されるムラが現れることから、ここもそうしたムラの跡かもしれません。



高須賀道城入遺跡
第32号土坑出土遺物

茨城県埋蔵文化財センター所蔵
写真提供: 公益財団法人茨城県教育財団



高須賀道城入遺跡全体図 ※『高須賀道城入遺跡』に一部加筆

3 古墳1 古墳時代の豪族居館跡

つくば JCT の建設に際して発掘調査された梶内向山遺跡(②)は、古墳時代後期、6世紀後半の豪族居館跡が発見されたことで大きな話題となりました。古墳が全国で約16万基確認されているのに対して、居館跡は数百例しか見つかっておらず、つくば市内唯一というだけでなく、全国的にも貴重な発見です。

◆二重の堀跡に囲まれた豪族居館跡

豪族居館とは、古墳に埋葬されるような地域の有力者が生前に住んでいた屋敷のことで、居住地が堀や柵等で区画されていることが特徴の一つです。

梶内向山遺跡の豪族居館跡では、長軸約90m、短軸約50mの範囲を一部で二重となる堀跡が囲んでおり、内堀跡で囲まれた内部に竪穴建物跡19棟が造られています。堀跡は幅7～10m、深さ30～100cmと広くて浅く、戦闘での防御には不向きですが、一般集落から隔絶した外観となっています。

◆広場と生活の場

居館跡のうち、建物跡がない外堀跡と内堀跡の間は、広場であったと考えられます。短辺だけを堀で区画するやや開放的な空間となっており、多くの人が集まって作業や集会、儀式等を行った公共的な場と推測されます。

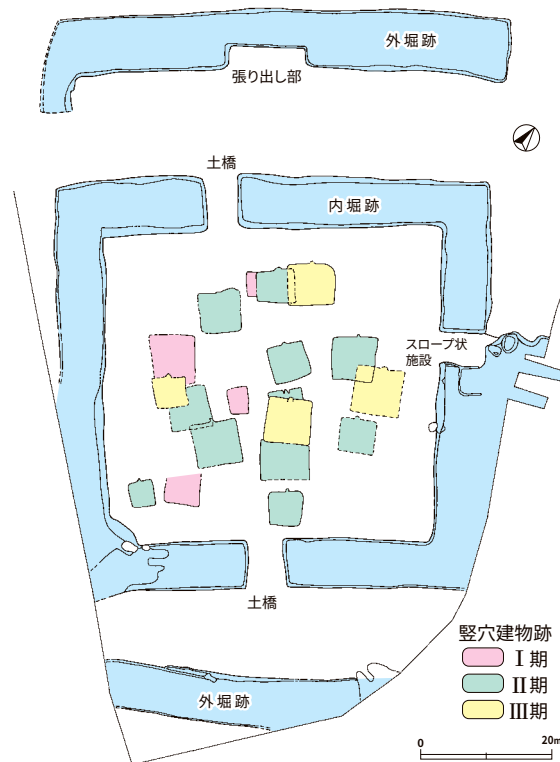
一方、内堀跡に囲まれた約50m四方の内部は、私的な生活の場と考えられます。竪穴建物跡は3時期に分かれ、同時には7棟前後がありました。建物跡の大きさは標準的で、出土品は日常的な土器が主体です。また、財産を貯えた高床倉庫跡や祭祀専用の施設がないことも、他地域の大型の豪族居館跡と比べたときの特徴となります。

◆梶内向山遺跡の居館跡と墓

居館の主である有力者の墓は、同時期で近くにある古墳が候補となります。

57基からなる下横場古墳群は、居館跡から見える南西0.5kmにあり、密接な関係があったと考えられます。出土した埴輪には、材料となる粘土に雲母を多く含むことが特徴である筑波山麓で作られたものに加え、千葉県北部のものと表現が共通している人物埴輪があることも注目されています。しかし、直径20m程度の円墳が群内最大級であり、居館跡に比べて小さく感じられます。

居館跡の南3kmにある下大井古墳群第5号墳は、墳丘長約42mの中型前方後円墳です。下横場古墳群よりも距離は離れていますが、居館跡の内堀跡内部と規模が近いことから、居館の主の墓とする説もあります。



梶内向山遺跡 豪族居館跡平面図

※『梶内向山遺跡』から一部改変して作成



梶内向山遺跡 豪族居館跡出土土器



左：下横場古墳群第51号墳 円筒埴輪



右：伝下横場古墳群第34号墳 人物埴輪

東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives

◆^{かじうちむかいやまい せき きょかん}梶内山遺跡の居館で暮らした人物

梶内山遺跡の居館跡は見た目には隔絶したのですが、そこでの暮らしは民衆とあまり差がなく、財産も蓄積していませんでした。この居館の主は、社会の階層化が進んでいく古墳時代にあつて、民衆から抜け出して成長し始めた有力者で、地域を代表する首長であったと考えられます。治めた範囲は小野川中流の小地域と推測されますが、下横場古墳群の埴輪が示すように、居館の目前を流れる小野川の水運を通じて、筑波山麓から千葉県北部に至る範囲の人々と交流した人物ともいえそうです。

4 古墳2 古墳時代の民衆の祭祀

^{なかうちにし つまい せき}中内西ノ妻遺跡(③)、^{たかす かなだひがし い せき}高須賀中台東遺跡(⑥)、^{たいらきただ い}平北田遺跡(⑦)、^{しまな い せき}島名ツバタ遺跡(⑧)では、古墳時代の集落跡が調査され、石や土で作られた鏡や勾玉等の模造品、小さく粗雑な土器等が出土しました。これらの道具は、神を祀るときに実用品の代わりとして使われたと考えられています。

◆^{せきせい も ぞうひん}石製模造品とヤマト王権

^{こふん じだいちゅうき}古墳時代中期の5世紀を主とした中内西ノ妻遺跡では、滑石という軟らかい石で、鏡を模した穴の空いた円形の板や、扁平な勾玉、小さな白玉等が作られました。つくば市内のほかの遺跡では剣の形の模造品も出土しており、「三種の神器」となる鏡や玉、剣に霊力があるという信仰が、地方の民衆にまで広がっていたことを示しています。

このような石製模造品は、全国的にほぼ同じ形をしており、近畿地方の古墳にも大量に副葬されたことから、地方のムラへの普及にもヤマト王権と繋がる技術者集団が関わったと推測されています。

◆^{せきせい も ぞうひん}石製模造品の使い方

石製模造品はほぼすべてに穴が空いています。『日本書紀』には、^{にほんしよき}神に実物の鏡や玉、剣を垂らして地方豪族が天皇を出迎えたとする伝説が書かれており、模造品も主に神に結び付けられて使われたと考えられています。

一方で、つくば市内の集落跡では、^{たてあなたてものあと}竪穴建物跡から1・2点程度が出土することが多く、廃棄した竪穴建物に対して捧げるような使い方もしたと推測されています。

◆^{ど せい も ぞうひん}土製模造品とミニチュア土器

6世紀になると石製模造品は作られなくなりますが、5世紀の高須賀中台東遺跡や6世紀の平北田遺跡では、焼き物の模造品が出土しています。中内西ノ妻遺跡の石製模造品と同様に鏡や玉類が模造されており、土製模造品も同じような使い方をしたと推測されます。

また、ミニチュア土器も、古墳時代を通じて各地で出土しています。実物のお供えものを入れた土器等に代えて使われたと想像されます。

これらの出土品は小さく目立ちませんが、人々の生活に神への祈りが定着していたことを伝えてくれます。



中内西ノ妻遺跡 石製模造品



平北田遺跡、高須賀中台東遺跡 土製模造品



高須賀中台東遺跡 ミニチュア土器

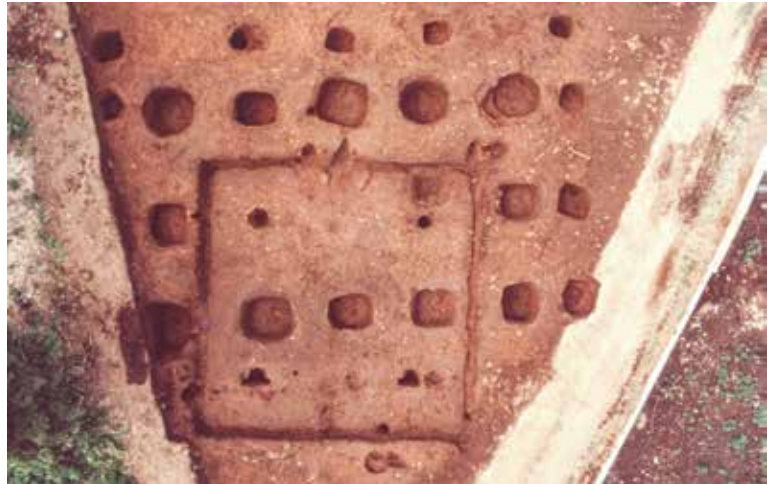
5 古代 古代の「村落内寺院」

大陸からの仏教伝来以降、持統天皇6年(692年)までに造られた寺の数は全国で545寺にのぼります。飛鳥・奈良時代の仏教は、大和朝廷が推奨したことで広がっていきましたが、当初は地方では郡司クラスの者までに限られていました。しかし、行基ら私度僧の民間への布教活動などもあり、8世紀半ば以降には、地方のムラへも仏教が浸透していききました。下大井遺跡(⑨)では、その頃の「村落内寺院」跡が見つかっています。

◆ 集落遺跡で見つかった仏堂跡

「村落内寺院」とは、国分寺や郡家関連寺院とは違う性格を持つ、集落遺跡内で確認された寺院のことです。古代の下大井遺跡は、竪穴建物跡を主体とした集落跡ですが、桁行4間・梁行2間の身舎に四面庇がついた掘立柱建物跡が1棟確認されています。

この建物跡は瓦が出土していないことから、板葺きか茅葺き屋根と考えられます。また、柱穴の掘方や列に規則性が乏しいことは、官営の施設の建物とは異なっています。これらの特徴と、後述する仏教に関する遺物の出土を考え合わせると、在地有力者が建立した「村落内寺院」の仏堂と考えられます。



下大井遺跡 第1号掘立柱建物跡 写真提供：公益財団法人茨城県教育財団

◆ 仏教と関わる出土品

下大井遺跡からの出土品には奈良・平安時代の「上寺」などと書かれた墨書土器、鉄鉢形土器、灯明皿、瓦塔片などが確認されました。

灯明皿は、器に注いだ油に灯芯となる紐を浸して火を灯したもので、器の縁にススが付着しています。古代の集落跡での出土は珍しく、この遺跡では仏前に供える火を灯したものと思われます。鉄鉢形土器は僧侶の修行の一つである「托鉢」(経文を唱えながら、食料や金銭を乞うこと)に使用する「鉄鉢」を模したものであることから、仏教に関わると考えられます。瓦塔は寺院の塔を模した焼き物で、写真の破片は屋根の一部にあたるものです。舍利を納めている塔は寺院の主要な建物であり、これを模した瓦塔は、そのものが信仰の対象と考えられています。いずれも仏教と関わりが深い出土品で、この地域に仏教が浸透していたことが分かります。



下大井遺跡 墨書土器「上寺」



下大井遺跡 鉄鉢形土器



下大井遺跡 灯明皿



下大井遺跡 瓦塔片



塔(イメージ図)

6中世 戦国～江戸時代の墓

中世での墓への埋葬は、前半までは武士や僧侶などの支配者層だけに限られていましたが、後半の戦国時代頃になると、有力な農民などへも広がりました。下大井遺跡(⑨)では戦国時代に台地の端に造られた単独の土墳墓が、梶内向山遺跡(②)では戦国時代から江戸時代までの溝で区画された土墳墓群が確認されています。

◆副葬品が豊富な土墳墓

下大井遺跡の台地の先端部で、直径1m、深さ50cmの土墳墓が発見されました。骨は一部しか残っていませんでしたが、ほぼ完形の瀬戸・美濃産の端反皿、火打金と火打石、銅銭6枚が出土しました。銅銭が中国からの輸入銭(渡来銭)のみであることや端反皿の年代から、16世紀頃のものと思われます。銅銭は三途の川の渡し賃ともされる六道銭で、火打金と火打石も魔除けの意味があったのかもしれません。また、豊富な副葬品から、埋葬されたのは村の有力者だったと思われます。



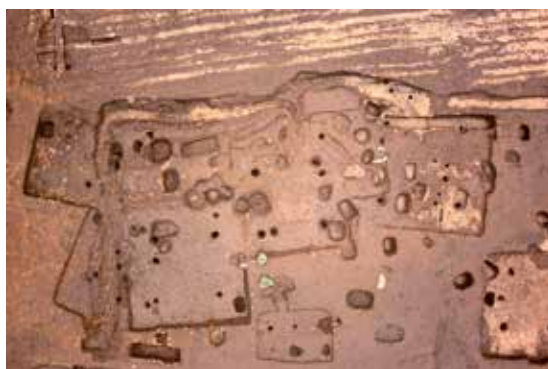
下大井遺跡 土墳墓遺物出土状況
写真提供：公益財団法人茨城県教育財団



下大井遺跡 土墳墓出土遺物

◆戦国時代からの土墳墓群

梶内向山遺跡の岬状に伸びた低い台地先端部で、溝に区画された土墳墓53基が発見されました。そのいくつかには、六道銭やかわらけ(土器皿)が副葬されており、その銭種などから16～18世紀まで継続して埋葬されたことがわかります。埋葬形態も様々で、体を折り曲げ寝かせた「臥屈葬」、座った状態の「座葬」、体を伸ばして寝かせた「伸展葬」などがありました。



梶内向山遺跡 土墳墓群
写真提供：公益財団法人茨城県教育財団



梶内向山遺跡 墨書土器「念誦□」

埋葬された人々は梶内集落に暮らしていたことが推測され、墓地を集落の外れに造ることや、墓地を営んだ人々が戦国時代から江戸時代にかけて、継続して暮らしていたことがわかる遺跡です。

7近世 村を区画する溝か

近世には、高度経済成長以前から存在していた伝統的な集落の基礎ができました。大字名の多くは江戸時代の行政区であった村の名前を由来としており、現在の道や地割、建造物にも江戸時代から引き継いだものが多く認められます。一方で、遺跡の調査によって現在は失われた江戸時代の景観がわかることもあります。その一例として樋ノ沢久保遺跡(⑩)で発見された溝跡を紹介します。

◆ 樋ノ沢村の区画溝か

樋ノ沢久保遺跡では、現在の樋ノ沢集落の外れにあたる場所で、17～19世紀の溝跡が発見されました。上幅0.9～3.4 m、深さ0.6～1.0 m、確認できた長さは南北40.8 mで、さらに調査区外へ続きます。現集落から離れた場所を囲う溝跡は、17・18世紀の上萱丸古屋敷遺跡で見つかっており、^{かみかやまるふるやしきいせき}屋敷や耕地を含んだ村の範囲を大きく区画したものと考えられています。樋ノ沢久保遺跡の溝跡も同様の区画溝であり、失われた江戸時代の村の景観を示すものかもしれません。

また、溝跡から出土した多数の土器や陶磁器は、17世紀には土器や瀬戸・美濃産の陶器が多く、18世紀以降には次第に肥前産の磁器が増加、19世紀以降には瀬戸・美濃産の磁器など新たに生産が開始された製品が増加するという変遷をしており、江戸時代の商品流通の変化を反映しています。



樋ノ沢久保遺跡 土器・陶器 17世紀代



樋ノ沢久保遺跡 陶磁器 18・19世紀代

おわりに

圏央道の下には、^{きゅうせつ き じ だい え ど じ だい}旧石器時代から江戸時代までの遺跡が数多くありました。これらの中には、存在すら知られていなかったものもありましたが、圏央道の建設に伴う発掘調査によって詳細が判明しました。発見された人々の生活の痕跡は、文字が使われる前の時代や、史料に書かれなかった人々の歴史を教えてくださいました。

つくば市では、発掘調査で得られた多くの資料を保存・公開して、地域の歴史を伝えていきます。

主要引用・参考文献

- ・茨城県教育財団 1998年『三度山・古屋敷遺跡』第132集
- ・茨城県教育財団 2001年『下大井遺跡』第171集
- ・茨城県教育財団 2002年『樋ノ沢久保遺跡』第186集
- ・茨城県教育財団 2003年『下大井遺跡2』第197集
- ・茨城県教育財団 2003年『梶内山遺跡』第199集
- ・茨城県教育財団 2005年『中内西ノ妻遺跡』第234集
- ・茨城県教育財団 2007年『新井南山遺跡・手代木田向遺跡』第267集
- ・茨城県教育財団 2011年『平北田遺跡』第336集
- ・茨城県教育財団 2014年『高須賀中台東遺跡』第382集
- ・茨城県教育財団 2016年『高須賀堂ノ前遺跡・高須賀道城入遺跡』第406集
- ・岡本東三 2002年『古代寺院の成立と展開』山川出版社
- ・上高津貝塚ふるさと歴史の広場 2010年『神の寺・山の寺・里の寺—古代仏教信仰の広がり—』
- ・関東文化財振興会株式会社 2022年『島名ツバタ遺跡—(仮称)つくばスマートインターチェンジ事業に伴う発掘調査報告書—』
- ・窪田恵一 2009年「茨城県筑波・稲敷台地の細石刃石器群—近年検出資料の観察・分析報告—」『常総台地』16 常総台地研究会
- ・関口慶久 2011年「常陸における中世墓研究の回顧と展望」『茨城中世考古学の最前線～編年と基準資料～』茨城県考古学協会
- ・橋本勝雄 2019年「本ノ木型尖頭器の特質とその意義—常陸大宮市内発見の旧石器の資料的位置づけ—」『常陸大宮市史研究』2 常陸大宮市教育委員会
- ・三舟隆之 2017年「古代東国の仏教受容と寺院」『古代東国の地方官衙と寺院』山川出版社
- ・三舟隆之 2020年「地方寺院の成立と国分寺建立」『テーマで学ぶ日本古代史 社会・史料編』吉川弘文館
- ・谷田部町教育委員会 1960年『古墳総覧』
- ・谷田部町教育委員会 1983年『下横場古墳群(南中妻179番地)』
- ・谷仲俊雄 2018年「茨城県の『豪族居館』—石岡市佐久上ノ内遺跡を中心として—」『古墳と豪族居館』東北・関東前方後円墳研究会